JADCI News

NO. 4

1991. 11. 27

The Japanese Association
for Developmental and
Comparative Immunology

Office: Department of Anatomy, Dokkyo
University School of Medicine, Mibu,
Tochigi 321-02

この３年をふり返って

村松　繁（京都大学理学部動物学教室）

私のファイルを繰って見ると、山口大学の友永進氏らのお世話で、宇部において比較免疫の国際シンポジウムが開かれたのは、１９８８年の１月３０日であることがわかった。次に発見したのは、獨協医大の古田恵美子氏からのFAX で、私が仮の会長に選ばれたという内容である。その時の晴天の霹靂のような気持ちは、今でも忘れることができない。何しろ私は口ではわかったようなことは言っていても、昔のいっとき、蛇をちょこといじくった経験はあっても、それ以外比較免疫らしい事をしたことがなく、会長になる資格など皆無であると思ったからである。この考えは今でも変っていない。しかるにその後の本選挙でも正式に会長に決ってしまい、忸怩たる感を免れ得ない。再選されないことを願うのみである。

学術集会もこれまでに３回開かれ、どれも楽しく成功であったし、参加者も徐々に増加の傾向にあり、今後の発展が期待される。楽しかったと言えば、会場の側にはアルコール飲料を含めた種々の飲みもの、果物、お菓子などが用意されていて、お花などが飾られていて、他の学会では見られない経験をさせてもらった。とに角、学会の準備と運営に３年も続けて当てられた古田先生をはじめ獨協医大の方々には頭の下る思いで一杯である。

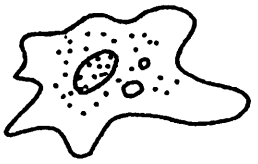
１９９１年の学術集会の第１日目は国際シンポジウムの形をとったが、本当に有意義であった。講演も討論も活発そのもので、こういうこじんまりしたシンポジウムの良さが遺憾なく発揮されたと思う。

ここでお知らせしておきたいのは、１９９１年の総会で会則の一部が変更になり、学会会長とは別に学術集会会長（任期１年）をおくことになったことである。初代の学術集会会長には友永進氏が選ばれ、第４回の学術集会は１９９２年８月に山口県の秋吉台で開かれることになった。また、友永氏は国際比較免疫学会（ＩＳＤＣＩ）のアジア・オセアニア地区担当の副会長にも選ばれ、国際的活動における友永氏の使命はますます重くなっていく気配である。

この場を借りて、ここでお知らせしておきたいことがある。最近、Edwin Cooper氏（ＤＣＩ編集主幹）から手紙が届き、それによると、アメリカ免疫学会（ＡＡＩ）のHenry Metzger 氏が１９９３年5月２１～２５日のアメリカ免疫学会に、ＩＳＤＣＩをguest society として招きたいという意向を示している。Cooper氏はそれに全面的に賛成であり、それをサポートする組織としてＩＳＤＣＩのほかに、アメリカ動物学会の比較免疫学分科会とともに、ＪＡＤＣＩを紹介したとのことで、その手紙のコピーも私のところに送られてきた。関心のある人は、私に手紙のコピーを請求されたい。

何はともあれ、新しい小さいものが発足し、これから成長発育する過程に身を置くことはとても幸福である。皆さんとともに、この幸福を味わい続けたいと願っている。

比較免疫学会第三回学術講演に出席して



北海道大学 医学部 第三解剖　牛木辰男

事の起こりは、今年の夏。魚類の研究で高名な新潟大学の本間義治教授が、「造血器と循環系」と題したシンポジウムを、佐渡の臨海研究所で行なうという。ついては君も出てこないか、というお誘いが北海道くんだりにまで届いてきた。私は本間先生の奥様を敬愛しているので、いや、もちろん本間先生ご自身をも敬愛してやまないので、ふたつ返事で佐渡のシンポジウムに参加させていただくことにした。

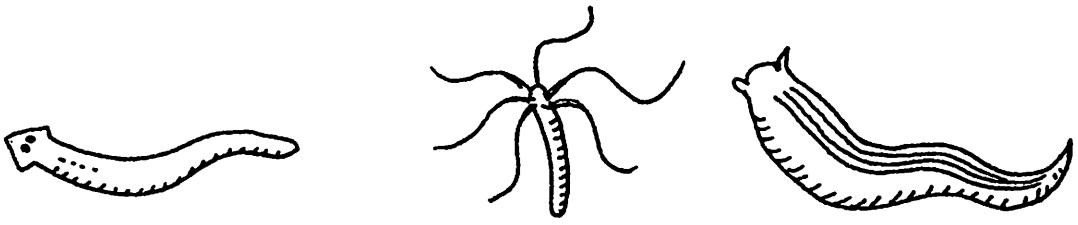
７月３１日に小樽から船に乗って新潟に向かった。せっかく佐渡に出向くのに、何も話題がないのはちょっと間が抜けているように思えたので、その場しのぎに「胸腺の微小環境」などという、えらく大きなタイトルを自分の演題につけてしまっていたが、このことを船の上でひどく後悔していた。しかし、臨海研究所でいろいろな方とお会いできるのは楽しみでもあった。

８月１・２日のシンポジウムは予想どおり、じつに有意義で楽しかった。昼の正式の会はもちろんのこと、夜の会はひときわ盛り上がった。だいたい佐渡の離れ小島の人里離れた小さな研究所で合宿するわけで、しかも「酒飲み」が多く集まった日にはその先は見えている。最初は、イカ釣り舟の漁火に見とれて情緒的な気分に浸っていても、じきに上を下への大宴会となっていった。

その中で、ナメクジの権威、独協医大の古田恵美子先生の迫力は絶大であった。私は初対面にもかかわらず、古田先生に「たつおクン、たつおクン」と頭を撫でられて、すぐに子分にさせられてしまった。そして、その勢いでいつのまにか日本比較免疫学会に入会することが決まり、薄い財布から千円札三枚が忽然と消えていった。さらに古田先生の勢いは留まることを知らず、しかもこちらもメートルがどんどん上がって、気がついたら月末の第三回比較免疫学会に参加することになっていた。

「飲んだときの約束は、できるかぎり守る」ということを信条としている私

は、北海道に戻ってきてからすぐに飛行機の予約の電話をした。幸運（？）なことに、夏の観光シーズンにもかかわらず切符はすんなり取れてしまった。そんないきさつで、今年の比較免疫学会学術集会に晴れて参加することにあいなった。



８月２８日、朝一番の飛行機で千歳を発って、何とも蒸し暑い羽田空港に着いた。工事を年中しているとしか思えない医科歯科大学の会場に辿り着いたときは、ちょうど学会の総会が行われていたが、あまりに頭数が少ないので、せめて頭ぐらいは役立てなければと、後ろの席でボウッとしていたら、すぐに昼食になった。会議室での昼食には、早速缶ビールがくばられた。今回は別に自分で発表する予定もないので、気楽な気分でビールを飲んでいたら、すぐに目の前に空き缶がいくつも並んでしまった。

アルコールで緊張がとけた頭にも、午後の招待講演は刺激的だった。無脊椎動物での生体防御の二つの様式、血球や食細胞による細胞性防御反応と抗菌物質による液性の防御反応が、さまざまな角度から論じられて、この分野には限りなく無知に近い私にとっても、十分熱気が伝わってきて興奮させられた。その夜の懇親会も楽しかったが、これ以上書くと酒の席の話ばかりになるので、もうこのあたりでやめることにする。

翌日以降の一般講演も、日頃は哺乳類にしか縁のない私には新鮮で面白かった。しかし、何よりも私にとって印象深かったのは、古田先生が私をある人に紹介してくださった時の記憶である。そのとき

「先生は何を研究なさっているのですか？」

と尋ねられた私は、一瞬返答に窮してしまった。俺は今いったい何の研究しているのだろう？　免疫系はサボッているから神経組織とでも答えようか、それとも結合組織の研究のほうが主体かな、とあれこれ考えていたところ、古田先生が助け舟を出すかのように、変わりに答えてくださった。

「この先生は哺乳類よ」

そうか！そうだったのだ、と、そのとき頭が真白になって、すっかり感動してしまった。ここでのキーワードは、もちろん「比較免疫」だから、動物の種類を答えさえすれば良かったのだ！　この出来事は、医学部のフツーの人間を自認する私にとってかなり衝撃的で、その結果、私は比較免疫学会が更に好きになってしまった。

ながながと私事を連ねてしまったついでに、今回の比較免疫学会の会期中にごく私的にした二つの口約束について記しておく。

一つは、新潟大学の大西耕二先生に私がした約束だ。懇親会の夜、私は酔った勢いも加わって、大西先生に神経系の系統発生について大風呂敷を拡げた話をした。大西先生はその話に強く興味を示されて、

「君の考えは、大学説になるかも知れない。とにかく文章にしてみなさい」

と、私をけしかけた。その言葉に煽てられた私は

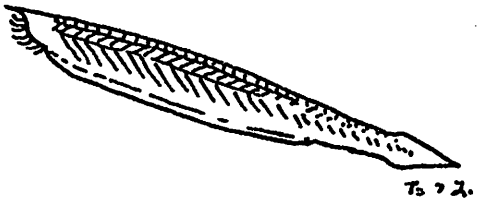
「帰ってから、すぐに作文をして先生にお送りします！」

と叫んでしまった。そして、それから三ケ月が過ぎようとしているが、私の作文は、まだ形にもなっていない。しかし、これは「飲んだときの約束」だから守らなければならないと思っている。

もう一つは、山口大学の友永　進先生に半ば一方的にこちらからお願いした約束だ。友永先生がナメクジウオを飼っていることを知った私は、先生にどうしても一匹分けて欲しいとお願いしたのだ。気前のいい先生は

「１０月にビデオを撮ったら、一匹送って上げましょう」

と、快く約束してくださった。しかし、このナメクジウオは１１月になってもまだ札幌には届いていない。私は、首を長くして待っている。



事務局から

今年の関東平野は、じくじくと雨の多い湿った夏でありました。幸いなことに、第３回のＪＡＤＣＩ学術集会は晴天に恵まれ、あのエキサイトした集会を無事終了することが出来ました。外国人研究者から、数々のお礼のお言葉をいただき、世話人としては光栄の感しきりでありました。今は秋、獨協医大のキャンパスは、毎日枯葉の乱舞です。そして寒い寒い冬がもうすぐやって参ります。

第４回の学術集会は、大会会長に山口大学の友永進先生をいただき、秋芳台で開催されることに決定致しました。また来年の夏、皆様とお目にかかれる日を楽しみに致しております。

どうぞ皆様、よいお年をおむかえ下さいませ。

平成３年11月末日

日本比較免疫学会

庶務／会計

古田恵美子

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

次回予告

日本比較免疫学会第４回学術集会

会期：１９９２年８月２６日（水）、２７日（木）、２８日（金）

場所：秋吉台グランドホテル（山口県美祢郡秋芳町秋吉台）

学術集会会長（オーガナイザー）：友永　進（山口大学）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

日本比較免疫学会第３回総会議事録

日時：１９９１年８月２８日
会場：東京医科歯科大学　　１号館９階講堂
出席者：１５名（欠席役員：野本亀久雄、栃内　新・渡辺　浩）

会長挨拶（村松　繁）
　　開会挨拶の後、議題の内容を簡単に説明し、書記として小林睦生を指名した。

審議事項

Ｉ）会則変更の件（村松　繁）
　１）会則 III　事業の項目に関して
　　『学術集会は役員会が委嘱した学術集会会長が企画・運営する。また、学術集会会長の任期は１年とする。』等の会則を別項として付け加える。

　２）会則 V　役員３の項目に関して
　　『会長は全個人会員の投票によって、得票数の最も多かった者に決定する。また役員会は候補者を推薦する事ができる』等の文章に変更する。

　３）会則の附則３に関して
　　『事務局には役員に準ずる補助役員を置く事が出来る』等の文章を加え、補助役員は役員会に出席する。

　　以上３項目に関して会則変更の提案がなされたが、満場一致で承認された。

II）次期学術集会の会長の件（村松　繁）
　役員会および只今承認された学術集会会長の制度を次期学術集会から導入するとし、役員会は来年の学術集会会長を山口大学の友永　進　氏にお願いしたい旨の提案がなされ、満場一致で承認された。

III）会計報告（古田　恵美子）
　平成２年度の収支決算をスライドを用いて説明し、会計監査役員が欠席のため会計監査の結果についても既に承認を頂いているとの報告がなされた。
　会計報告および会計監査の結果は満場一致で承認された。

報告事項

I）次期学術集会の件（友永　進）
　友永　進　氏より次期学術集会会長として挨拶がなされ、予定として1992年8 月26-28 日の日程で秋吉台グランドホテルで開催したいので企画・運営等に関してご協力を頂きたい旨のお願いと報告があった。

II)今回の学術集会開催にあたっての会計報告　　（古田　恵美子）
総収入194 万5 千円を予定しており、総支出は181 万7 千円が見込まれております。なお、残高に関しては次期学術集会に援助金としてお回ししたい旨の報告があった。また、多くの賛助会員・協賛企業に感謝が表明された。

III)国際比較免疫学会（ISDCI)およびその雑誌について（友永　進）
1)昨年の学術集会のAbstractは一部の原稿の集まりが悪く、非常に遅くなったがVol.15のNo.2のDevelopmental and Comparative Immunologyに掲載される予定である。
2)今年７月下旬に米国で開催された国際比較免疫学会総会に関して
・現会長はISDCI の会員数（現在約300 名）をより増やしたいと表明。
・全世界を３地域に分け各地域に副会長を置いた（アジア・オセアニア地域は友永　進）。
・今回の会議で"Developmental and Comparative Immunology"をISDCI の公式学会誌として確認した。
・会費が来年より10ドル程値上げになる。
・DCI の論文掲載が遅れているが、来年より隔月発行を予定しており、ページ数も漸次増やしていく。
・次期国際比較免疫学会総会は1994年オランダで開催される事が決定された。
以上の報告がなされた。

（質問）現在日本のISDCI の会員は何名くらいか？　との質問がなされ、友永　進氏より、1989年の段階で55名ほどで、現在はそれより増えているのではとの解答がなされた。

役員会より

役員会において下記の者が次期会長候補に推薦されました。

村松　繁　（京大・理）